

一般演題

1. 恥骨および坐骨の avulsion injury

栗原 紀子 丸岡 伸 有賀 久哲
金 成柱 中村 護 坂本 澄彦

(東北大・放)

2 例の骨盤部の avulsion injury を経験したので報告した。

症例 1 は 14 歳男子、陸上の練習中に左坐骨部痛が出現し、単純写真で両側の坐骨結節部の腫瘍が疑われた。骨シンチ上、同部の uptake の上昇を認めた。症例 2 は 16 歳男子、サッカーの練習中に右股関節内側部の痛みが出現し、単純写真で右恥骨結合部から恥骨下枝にかけて辺縁不整像を認めた。骨シンチで右側より低いものの左側恥骨結合部にも uptake の上昇が認められた。

avulsion injury は apophysis に付着する筋肉の収縮により起こり、思春期から apophysis の癒合する 25 歳頃までに起こることが多い。好発年齢、部位、痛みの特徴等から診断は比較的容易であり、骨シンチは必ずしも必要とは言えないが、骨腫瘍を除外するために有用な場合があると考えられた。

2. DEXA 法による女性 RA 患者骨塩量の検討

永尾 一彦 加藤千恵次 中駄 邦博
塚本江利子 伊藤 和夫 古館 正徳

(北大・核)

佐川 昭 (同・二内)

二重エネルギー X 線法を用いた骨塩定量装置 XR-26 により女性 RA 患者の骨塩量を測定し検討をおこなった。対象は 44 例で RA の STAGE 分類には Steinbrocker らの臨床分類を用いた。腰椎、橈骨遠位 1/3 での測定では、いずれの場合も STAGE 3 と 4 とで有意な骨塩量の差が認められたが、橈骨での低下率が腰椎よりも大きかった。また、橈骨遠位 0~8 cm の範囲で骨塩量のプロフィールカーブを求め、健常人と比較したところ、遠位端よりも骨幹部の方が低下率が大きかった。このことは、骨幹部の osteoporosis が、関節周囲の炎症の直接波及に起因しているとは考え難く、全身性の骨代謝異常の関与を示唆するものと考えられた。

3. 軟骨肉腫の骨シンチグラフィ

有賀 久哲 栗原 紀子 金 成柱
高瀬 圭 丸岡 伸 中村 護

坂本 澄彦

(東北大・放)

組織学的に軟骨肉腫と診断された 15 症例に対し、^{99m}Tc-MDP による骨シンチグラフィを施行した。

症例は、男性 4 例、女性 11 例、計 15 症例で、平均年齢は 43.5 歳である。発生部位は骨盤 4 例、肩甲骨 3 例、大腿骨、上腕骨、脊椎および肋骨各 2 例で、うち 3 例は二次性軟骨肉腫であった。術後局所再発 3 例、骨転移 3 例、肺転移 4 例がみられた。骨シンチグラフィでは、原発巣・骨転移巣に有意な取り込みが認められた。

軟骨肉腫は、一般に遠隔転移が少いと言われているが、われわれの症例では 3 例に骨転移がみられ、骨原発巣・骨転移巣の検索、術後局所再発の経過観察に、骨シンチグラフィは有用な検査と考えられた。

4. 下肢 Tl-201 SPECT の検討

西澤 一治 篠崎 達世 (弘前市立病院・放)
三浦 弘行 (弘前大・放)

公平 一彦 (同・一外)

正常 4 例、下肢虚血性疾患 8 例に、²⁰¹Tl SPECT を施行し、腹側・背側 (屈側) の筋群に ROI を設定して集積の変化を検討した。正常安静時では、大腿・下腿ともに左右差や腹側と背側群にはあまり差は無いが、臥位のエルゴメータによる負荷では大腿下腿ともに背側に比べ腹側筋群の血流増加が顕著であった。また 4 時間後の再分布では、大腿では全体に activity が減少するが、下腿の背側では逆に増加するものも見られ、態度を異にした。動脈閉塞性疾患では、SPECT は planar image に比べ虚血の検出には鋭敏であるが、大腿では側副血行路のため複雑な分布を呈し一定の傾向は捉えられない。下腿では腹側に比べ背側筋群の血流が増加する傾向がみられた。手術前後を比較した症例では、血流の回復は大腿よりも下腿の方が大きかった。